

まえがき

「宮殿」と聞いて、何を思い浮かべるだろうか。大理石の大階段に、豪華絢爛なシャンデリア、そして華やかな衣装に身を包んだ人々による晩餐会……ばんさんかい。皇帝や国王の居住のための宮殿は我々の身近にはないが、想像を膨らませるに事欠かない。

現にイギリスであれば、バッキンガム宮殿、フランスであれば、ヴェルサイユ宮殿、中国であれば、紫禁城。いずれも艶やかあでであり、また国家の権威を映す鏡として、厳然として宮殿は存在している。これらに代表されるように、古今東西、君主の居住する宮殿は、今日に至るまで建設され続け、宗教施設とともに、国家を象徴する建築であった。

そのため、宮殿は他の建築とは異なることを明確に示すサインに満ち溢あふれており、その特別さを誇示した。歴史的背景、風土的条件などによってその内容は多岐にわたるが、大きな政治権力と経済力を背景に、最高級の技術が用いられ、精緻な彫刻や華美な彩色が施された壮麗な建築とすることが多い。それゆえ、建築を通して歴史を語ろうとする際には、不可欠の施設で

ある。

ところが、日本の宮殿となると、様相が少し異なるのである。

日本の伝統的な建築といった時には、宮殿ではなく、寺社や城が思い浮かぶのではなからうか。寺社であれば、法隆寺・東大寺・伏見^{ふしみ}稻荷^{いなり}、城郭であれば、姫路城に彦根城。日本には多くの古建築が残る。むろん、宮殿も京都御所、桂離宮^{かつら}、修学院離宮などが現存するが、いずれも江戸時代のものであり、さらに政治の中心ではなかった。

宮殿と権力の頂点の場所の不一致という背景には、日本の歴史の特殊性が絡んでいる。古代日本では、天皇の居所としての宮殿が、他国と同じように権威の象徴としての存在意義を有していた。これが天皇中心の体制から徐々に変化していくことで、宮殿の役割も変容していったが、宮殿自体が失われることはなかった。

すなわち、摂関政治、院政、そして武家による政権と、天皇以外に政治権力が移りつつも、天皇は形式上の地位を保っていたため、天皇の居住地は宮殿であり続けた。宮殿は必ずしも政治の中心ではなかったのであるが……。

ここまで読んできて、だったら日本で宮殿を取り上げることには意味はないのではないか、と思われる方もいるかもしれない。確かに、平安時代以降、日本の歴史の舞台において宮殿の影

は薄くなつていく。

しかし、古代、それも飛鳥あすかから奈良時代にかけての「日本」は、混迷する東アジア情勢のなかで苦境に立たされており、新たな国家を目指して変革を試みていた。その対象は宮殿や都城じょうといったインフラにも及んだ。これらが社会制度や権威を象徴していたがゆえに重視されたのであり、宮殿の歴史が時代を映していたと言っても過言ではないのだ。

では古代の宮殿と聞いて、イメージが湧いてくるか、というと、ほとんど知られていないのが現状であろう。『古事記』や『日本書紀』に収められた歌には宮殿を称たたえるものもあり、八重垣や千木・鰐木ちぎ かつおぎなどの装飾への言及があるが、宮殿の具体像は見えてこない。これが飛鳥時代以降となると、発掘調査や文献史料の情報が充実してくるため、その輪郭がはっきりとしてくる。

そこで本書では、古代の宮殿に光を当てることで、その舞台を通して見えてくる古代の国家形成の群像劇を描いていきたい。明治維新で試行錯誤を経て近代国家への生まれ変わりが図られたように、この時期の日本も文字通り、国際社会のなかで律令を基幹とする国家の誕生に向けて、紆余曲折うよくせつしていたのだ。

本書の全体構成を紹介しておく、宮殿建築から歴史を読み解く前提として、序章ではまず

建築の持つ権威性について述べておきたい。また、古墳時代以前から存在する階層社会と形による差別化という建築の持つ観念的な側面も紹介する。

そして第一章では、本書の主題とする古代国家形成の背景にある緊迫の東アジア情勢へと話を進めていきたい。この時期には、宮殿建築が他の建築とは隔絶した存在として造り上げられていくのにあわせて、計画的な都市である都城が形成された。都城は宮殿と同じく、律令国家を体現する舞台装置であり、遷都とも深く関わってくる。そのため、古代宮殿が置かれた都の様相や移動を概観したい。

これらの背景を踏まえて、第二章から個々の宮殿を見ていくが、まずは古代宮殿の基本構成である大極殿・内裏・朝堂院だいごくでん だいり ちやうどういんという三つの要素を押さえておこう。六・七世紀には仏教の伝来にもなう寺院建築の導入により、大陸から新しい建築技術がもたらされており、その変容についても語りたい。とくに、伝統的な王宮から古代の宮殿への変化において、公的な儀礼空間である大極殿はキーとなる最重要施設の一つである。

また宮殿の建築や空間の成立とともに儀式も整っていき、宮殿建築の「カタチ」とともに、古代宮殿を成立させるもう一つの側面を示すようになる。そのため、この宮殿における儀式の萌芽ほうがの様子も描いていく。

前期難波宮なにわのみやで朝堂院、飛鳥宮あすかきゅうで大極殿が形成され、藤原宮ふじわらきゅうで両者が揃うと、さらに藤原宮大極殿では礎石・瓦葺せせき かわらぶきという大陸的な建築が造り上げられた。律令国家を目指すにあたって、宮殿の「カタチ」を模索する様子がうかがえる。加えて藤原京では条坊による都城が形成されており、それを踏まえて律令国家の中心としての宮殿を捉えてみよう。

第三章で取り上げる平城宮へいじょうきゅうでは、朝堂院が二つとなり、宮殿における儀式も整っていった。諸宮殿の遺跡のなかでは発掘調査も進んでおり、内裏・大極殿・朝堂院の様相がつぶさに明らかになっている。

さらに平城京は唐の長安にならった都城で、平城宮の正門である朱雀門すざくもんから南に朱雀大路が約三・七kmにわたって延びており、壮麗な都を造り上げた。藤原宮から平城宮へと遷るにあたって、大極殿や朱雀門が移築されたとみられており、そこには造営を急ぐだけではない古代宮殿の存在意義に関わる理念が隠されている。

奈良時代には、平城京と同じように地方でも国府や郡家ぐんけで諸施設が整えられ、国分寺をはじめとする寺院も建立された。この大造営を通して、日本列島が大きく改造された時期でもあったのである。

第四章では、古代宮殿の完成形とそこからの変容を見ていきたい。

八世紀中頃に、聖武天皇は恭仁京・難波京・紫香樂宮と遷都を繰り返したが、再び平城京へ戻る。桓武天皇かんむによつて都は長岡京へと遷り、その後、平安京へ遷ると、長く日本の都として存続した。

この長岡京や平安京の遷都の過程で、朝堂院と大極殿の關係が再編成され、平安宮へいあんきゆうでは、大極殿と朝堂院が合わさった政務のための八省院はつしよういんと、饗宴きやうえんのための豊樂院ふうらくいんという、二つの朝堂院が並立することになる。

いっぽうで、徐々に律令体制が変容していくと、宮殿の機能が内裏へと集約されていき、古代宮殿の「カタチ」にも影響を及ぼしていく。さらに天皇の居所たる内裏自体も本来の宮殿である大内裏から飛び出して里内裏さとへと移っていき、ついには古代宮殿、あるいは律令国家の象徴である大極殿すら再建されなくなっていく。こうした宮殿の空間構成の変化は、古代日本の根幹であつた律令制が機能不全へと陥つていった様相をよく映している。

終章では、終焉しゆうえんを迎えた古代宮殿と、天皇の居所として継承されていく内裏について述べる。直接的な政治の中心の場ではなくても、為政者にとって、内裏の造営は特別な意味を持続けた。この内裏の立ち位置こそが、実質的な為政者とは別に天皇制が残り続けるという日本独特の歴史を示しているのである。

このように、本書のテーマである古代の宮殿を深く知ること、古代東アジアの激動の渦中における律令国家の形成という歴史的潮流に触れる扉も開かれるだろう。宮殿はその国の歴史を映す鏡であるから、日本の宮殿の特質を通して、日本の歴史の特質に迫ってみたい。

目次

まえがき

3

序章 宮殿建築から歴史を読み解く

17

1 権力と建築

農耕が階層社会をつくる／政治的権威を示す宮殿

2 建築の差別化

古代の宮殿を巡る材料／大規模化と細部意匠による誇示／
伝統と革新は共存する／寺院と神社の対比する「カタチ」／
宮殿建築から見えてくるもの

第一章 緊迫の東アジアと都城

1 七・八世紀の東アジア情勢

隋の滅亡と唐の隆盛／朝鮮半島の混乱／白村江の戦いと三国時代の終焉／
七世紀後半の東アジア外交／威信を誇示した巨大建築

2 倭国から日本へ

天皇を中心とする国家形成へ／乙巳の変と蘇我本宗家の滅亡／
飛鳥から近江大津宮へ／大王から天皇へ

3 飛鳥以前の宮殿と集住

みやこと遷居／社会階層を強く明示する装置としての宮殿／
私的と公的な空間の混在

4 都城の形成と遷都

条坊制と都城とは何か／古代の遷都と複都制／飛鳥の景観と前期難波宮／
条坊制を備えた都城・藤原京／なぜ藤原京は短命で終わったのか／
藤原京の課題を克服した平城京／恭仁宮から難波宮・紫香楽宮へ／

「幻の都」とも呼ばれた長岡京／ボトムアップで造られた平安京

第二章 飛鳥の宮殿から藤原宮へ

1 古代宮殿の基本構成

大極殿院・内裏・朝堂院の三つの空間／古代宮殿の二面性／

飛鳥の宮殿（小墾田宮）の大殿・朝堂／宮城十二門と門号氏族

2 前期難波宮と飛鳥宮

飛鳥周辺を移動する宮殿／前期難波宮で起こった古代宮殿の大変革／

大極殿の成立…飛鳥浄御原宮／外国使節の饗宴と漏刻台

3 藤原宮

大極殿・内裏・朝堂院の基本構成の成立／朝堂院の空間構成／

藤原宮で確立した大極殿院／礎石・瓦葺の宮殿の出現／巨大宮殿の造営の苦勞／

朝堂院の構成と第一堂の特殊性／正月儀礼の成立

第三章 平城宮・恭仁宮・後期難波宮

1 奈良時代前半の平城宮

平城宮の前半・後半で異なる構成／平城宮の顔、朱雀門の特殊性／
平城宮の心臓、大極殿と大極殿院／楼閣による荘厳／移された大極殿と朱雀門／
多くの謎を秘めている二つの朝堂院／大嘗宮と朝堂院の切っても切れない関係／
正月儀礼と外国使節との接遇／実務を支えた官衙／唐招提寺に現存する朝集堂

2 奈良時代後半の平城宮

古代宮殿の空間構成の完成／天皇と太上天皇のための二つの内裏／
なぜ正月儀礼が西宮で行われたか／称徳天皇が想いを込めた西大寺へのルート

3 地方官衙

地方でも徹底された中央の服属儀礼／多種多様の国庁と郡庁／
中央を超越する大宰府／なぜ駅家は荘厳が求められるのか／
地方支配のための正倉院

第四章 平安宮

1 繰り返される遷都

後期難波宮から長岡宮への移築／なぜ長岡宮は短命に終わったのか

2 平安宮の構造

大極殿院から八省院へ／国家的な饗宴施設・豊楽院／

平城宮の第二次大極殿からの移築か／紫宸殿を中心にした内裏の構成／
再び平城宮へ／王朝文化で彩られた清涼殿

3 古代宮殿の変容

応天門の変から摂関政治へ／律令制の崩壊と宮殿の変容／
荒廃した宮殿での肝試し／被災した内裏の再建と里内裏／
院政が行われた里内裏／平安宮との決別と古代の終焉

終章 継承される宮殿

武家の台頭で変わった内裏の存在意義／織豊政権が造営した天正度内裏／

徳川の意向が反映された慶長度・寛永度内裏／移される内裏／
復古を目指した寛政度内裏

あとがき

292

主な参考文献

297

図版出典一覧

303

本書は、膨大な文献資料の調査・整理・解説による研究成果や発掘調査、建築調査にもとづいており、それらから図版や写真などを引用している。発掘調査の図や文献資料に掲載された図など、馴染みのないものも多いかもしれないが、これらを紹介することによって最新の研究成果を盛り込むことを心掛けた。興味を持たれた方は、それらの文献資料や調査報告書などの原典を手に取り、より深く古代宮殿の魅力を探究していただきたい。